

小中一貫校南アルプス市立白根飯野小学校

令和7年度 後期学校関係者評価書

【学校運営協議会】

- 1 実施日 令和8年1月16日（金）
- 2 会場 白根飯野小学校 イングリッシュルーム
- 3 参加者

(1) 学校運営協議会委員（6名）

No.	氏名	役職
1	市川 和郎	元白根飯野小学校長 白根巨摩中学区学校運営協議会（小中一貫教育推進協議会）委員
2	飯野 久	南アルプス市議会議員
3	飯田 哲夫	元白根飯野小学校長
4	松野 昇平	PTA会長 白根巨摩中学区学校運営協議会（小中一貫教育推進協議会）委員
5	米山 英直	飯丘地区自治会長 白根巨摩中学区学校運営協議会（小中一貫教育推進協議会）委員
6	米山 光広	飯野地区自治会長

(2) 学校職員（3名）

No.	氏名	役職	備考
1	保坂 泉	校長	本校在籍2年目
2	中島 則雄	教頭	本校在籍1年目 / 事務局
3	飯野 めぐみ	教務主任	本校在籍3年目

4 学校から提案した内容

- (1) 教職員による前期自己評価アンケートの状況
- (2) 学校生活に関する前期児童アンケートの状況
- (3) 学校生活に関する保護者アンケートの状況
- (4) 白根飯野小学校前期自己評価書（アンケートの分析及び改善方策について）

5 学校関係者評価委員会報告概要

本校の学校評価は、学校教育目標の実現（学校経営方針の実現に向けた本年度の努力点）のための取組状況を、教職員による自己評価に加え、保護者と児童によるアンケート調査結果を活用する中で、それぞれの立場を踏まえるとともに、これらに関わる設問に寄せられた意見や、日常的に行っている児童観察も加味して分析し考えている。

なお、今回の調査は2学期の取組が根拠となる。

[1] 評価基準

全体傾向を把握するため、A B評価を肯定的評価とし、それらの合計が、80%を超えている場合は『満足できる状況』と判断した。また、C D評価を否定的評価とし、それらの合計が20%を超えている場合は『改善の余地がある状況』と判断した。

(A: そう思う B: だいたい思う C: あまり思わない D: そう思わない E: わからない)

[2] 各項目の分析

7月に実施した前期の結果同様、教職員による自己評価においては24項目中すべての項目、保護者アンケートでも16項目中、14項目において、A B評価の合計が80%を超えた。教職員・保護者の各アンケートの全体平均では、教職員、保護者ともA B評価が93%となり、前期とほぼ同様の結果となった。

一方、教職員アンケートでは全ての項目においてC D評価の合計が20%を超えたものはなかったものの、保護者アンケートでは2つの項目でC D評価の合計が20%を超える結果となった。

以上のことから、現在の本校は、概ね「満足できる状況」にあると判断できるものの、いくつかの課題も見られる。一つひとつの課題にしっかりと目を向け、それを改善することでより良い白根飯野小学校を構築していきたい。

(1) 「確かな学力」について

教職員アンケート1-5 児童アンケート2、5、8 保護者アンケート3、4

全体として、教職員の組織的な改善努力が、保護者からの極めて高い信頼と児童の変容として結実している状況が顕著に表れている。

本領域では、教職員側の組織的な改善努力が着実に進んでいる一方で、児童の家庭学習習慣や授業への主体的関与といった「家庭から見える姿」については、依然として課題が継続している現状が浮き彫りとなった。

教職員

教職員評価において最も顕著な成果は、項目5「職員の学び合い」の向上である。A評価が26%から50%へと倍増しており、互見授業や校内研修を通じた指導力の向上に、組織全体で取り組む文化が定着した。この組織力を背景に、項目3「ペア・グループ学習」でもA評価が11ポイント上昇(28%→39%)しており、対話的な学びの土台作りは着実に進んでいる。一方で、項目2「対話的な深い学び」のA評価は16%前後で停滞しており、一部でC評価も残って

いる。これは、学習形態の導入（ペア学習等）は進んだものの、それをいかに「思考の深化」に結びつけるかという点において、教職員がより高度な専門的課題に直面している証左といえる。

保護者

保護者評価（項目 3・4）については、7月から12月にかけて大きな変動が見られず、ほぼ横ばいの数値（項目 3：55%、項目 4：34%）となっている。特に項目 4「家庭学習・読書習慣」において、A 評価が 34%に留まり、改善が見られない点は注視すべき課題である。教職員側は項目 4「家庭学習の工夫」において、A 評価を 11%から 20%へと引き上げ、教材工夫や働きかけを強化している自負があるが、その努力がまだ家庭での具体的な行動変容や、保護者の実感として結実していないという「認識の乖離」が生じている。

今後の展望

今回の分析から、学校内での「教員同士の学び合い」や「授業形態の改善」は進んでいるものの、それが児童の「家庭での学習習慣」や「授業への主体的参加」という目に見える成果として保護者に伝わりきっていないことが分かった。今後は、学校内での授業改善を継続しつつ、家庭学習の目的や内容をより具体的に可視化し、保護者と共有する取り組みを強化する必要がある。3 学期は、単に宿題を課すだけでなく、児童が自ら進んで学びたいような「興味の喚起」を授業内でいかに作り出し、それを家庭へと繋げていくかが、学力向上と保護者満足度の両面において鍵となる。

【2】「豊かな心」について

教職員アンケート 6-12 児童アンケート 1、3、4、6、7 保護者アンケート 1、2、5、6、11

全体として、読書習慣や道徳的実践力の向上に大きな成果が見られる一方で、集団づくりや礼法指導において教職員がより高い専門性を追求し始めている現状が浮き彫りとなった。

全体として、組織的な読書指導や道徳教育が教職員の手応えとして現れている一方で、学級経営や礼法指導については、年度後半の課題の複雑化に伴い、教職員がより高い視点から自省的に評価している傾向が見て取れる。

教職員

教職員評価において特筆すべき成果は、項目 10「読書習慣の育成」と項目 11「道徳的実践力（強く生きる心）」の向上である。項目 10 では A 評価が 32%から 53%へと大幅に上昇し、全教職員が読書活動の重要性を共有し、時間を確保した成果が明確に現れた。また、項目 11 においても A 評価が 5%から 25%へと躍進し、C 評価が 16%から 5%に激減した。これは、2 学期の道徳の授業や文化芸術体験を通じ、児童の心の深まりを教職員が実感できている証左と言える。

一方で、項目 6「児童の居場所づくり（学級づくり）」では、A 評価が 47%から 35%へと減少している。これは決して指導の退行ではなく、2 学期の学校生活が長期化し、人間関係が複雑化する中で、一人ひとりの居場所をより精密に保障しようとする教職員の「質の高い危機意識」の表れと分析できる。同様に、項目 12「礼法・挨拶」の A 評価が 26%から 20%へ微減している

点も、教職員が求める指導レベルが高度化していることが背景にあると考えられる。

保護者

保護者評価については、劇的な変動は見られないものの、全般的に肯定的で安定した推移を示している。項目6「相手を思いやる豊かな心」はA評価が43%から55%へ、項目6「友達への思いやり」は43%から55%へと増加しており、学校での指導が一定の成果を保ちつつ家庭に届いている。また、項目9「学校開放・保護者連携」のA評価が56%から60%へ向上している点は、2学期の行事を通じた児童の心の成長を、保護者が肯定的に捉えている証である。

今後の展望

今回の分析から、学校での重点的な「読書・道徳」の指導が、教職員の確かな手応えとなっていることが確認された。一方で、保護者評価が「横ばい」であることは、学校内での心の深まりが、まだ家庭での「具体的な行動変容」として完全には可視化されていないことを示唆している。今後の課題は、教職員の自己評価に見られた「学級づくりの質的向上」である。3学期は学年・学級のまとまりを再構築し、学校での心の成長をいかに家庭や地域へ発信し、共有していくかが、さらなる信頼獲得の鍵となる。

【3】「健やかな体」について 教職員アンケート13、14 保護者アンケート10、12

全体として、教職員による組織的な指導の「底上げ」が、保護者の極めて高い満足度と家庭での習慣化に繋がっているという、非常に良好な傾向が確認された。

全体として、安全意識の向上という成果が見られる一方で、冬場にかけての生活習慣の維持に教職員・保護者双方が課題を感じている実態が浮き彫りとなった。

教職員

教職員評価では、項目13「運動習慣の育成」において肯定的な評価(A+B)が89%から95%へと上昇した。A評価自体は33%から30%へ微減しているものの、C評価が11%から5%へ半減しており、運動が苦手な児童に対しても組織的な支援が行き届き、ボトムアップが図られた成果と言える。一方、項目14「健康な生活習慣(運動・食事・睡眠)」については、肯定評価の合計は変わらないものの、C評価(5%)が消失した一方でD評価が5%出現した。これは、多くの児童が安定した生活を送る一方で、一部の児童において生活リズムの乱れが深刻化していることを、教職員が敏感に察知し、危機感を強めている状況を示唆している。

保護者

保護者評価において顕著な伸びが見られたのは、項目10「安全な登下校」である。A評価が40%から48%へと上昇し、交通安全指導や地域での見守り活動が一定の安心感に繋がっている。課題が鮮明となったのは、項目12「早寝・早起き・朝ごはん」である。7月には62%あったA評価が、12月には51%へと11ポイントも大幅に下落した。2学期後半の日の短さや寒さ、あるいは家庭での生活リズムの緩みが、児童の健康基盤を揺るがしている現状が推察され

る。教職員項目 14 で D 評価が出現した時期と、保護者の A 評価が激減した時期が一致しており、学校と家庭が同じ課題に直面していることがデータからも裏付けられた。

今後の展望

本領域の分析から、学校内での「運動習慣」や「安全教育」は順調に進展しているものの、学力の土台となる「生活習慣」の維持に黄信号が灯っていることが分かった。3 学期は、単なる啓発に留まらず、教職員と家庭が連携して生活リズムを立て直すための具体的な働きかけを強化する必要がある。特に、生活習慣が崩れがちな児童への個別支援を教職員間で共有するとともに、保健便り等を通じて「冬場の生活リズム維持」の重要性を保護者に粘り強く発信していくことが、次年度へのスムーズな接続に向けた最優先事項である。

【4】「グローバルに活躍する人材」について

教職員アンケート 15、16、17

本領域では、社会参画意識の向上に成果が見られる一方、「グローバル」の捉え方や教科横断的な教育課程の編成において、教職員が専門的な課題に直面している現状が浮き彫りとなった。

本領域の教職員による自己評価を分析すると、教育課程の具体的な具現化に向けた組織的な試行錯誤と、着実な進展が見て取れます。

教職員

項目 16 「外国語活動を通じた共生態度」および項目 17 「教科横断的な教育課程の工夫」において、最高評価である「A 評価」がいずれも上昇している点（項目 16 : 39%→40%、項目 17 : 22%→25%）は、大きな成果である。これは、2 学期に総合的な学習の時間や外国語活動の実践が本格化する中で、指導の手応えを感じている教員が増えていることを示している。特に項目 17 では、B 評価が 61%から 60%へと微減したものの、A・B 評価を合わせた肯定評価は 83%から 85%へと向上しており、組織的な授業改善が着実に進んでいると言える。

一方で、項目 15 「社会と関わる意欲・態度の育成」については、A 評価が 16%から 15%へと横ばいで推移しています。肯定評価自体は 9 割に達しているが、児童の学びを「実社会での具体的な行動」へと繋げるレベルにおいては、依然として教職員が課題意識を持ち、より高い質の指導を模索している現状が伺える。

今後の展望

今回の分析から、本校のグローバル教育は「児童の意識変容」という出口においては着実な成果を上げている。今後の課題は、教職員が感じている「教科横断的な指導の難しさ（項目 17）」の解消である。3 学期は、教職員一人ひとりが全ての重責を負うのではなく、各学年の成功事例を共有し、既存の授業に「グローバルな視点」を一つ加えるといったスモールステップの実践を推奨したい。保護者の厚い信頼を励みに、教職員がゆとりを持って、子供たちと共に世界へ目を向ける姿勢を組織として支えていく必要がある。

【5】「特別支援教育の推進」について

教職員アンケート 18-21

全体として、個別のニーズに対する教職員の意識と、保護者との信頼関係構築において大きな進展が見られる一方で、年度後半に向けた組織運営や集団指導の維持において、新たな課題が明確化している。

全体として、個別のニーズに応じた支援と保護者連携において多大な成果を上げた一方で、多層的な支援体制の維持と学級集団への還元において、年度後半の新たな課題が明確となっている。

教職員

教職員評価において最も特筆すべきは、項目 20「保護者相談と連携」の飛躍的向上である。A 評価が 32%から 60%へとほぼ倍増し、C 評価が消失した。これは、個別の教育支援計画等の共有や丁寧な面談が実を結び、保護者と足並みを揃えた支援が実現できている証左である。また、項目 18「個の実態把握」でも A 評価が 30%へ向上し、支援の解像度が上がっている。

一方で、項目 19「校内支援体制」では A 評価が 47%に伸びる反面、初めて C 評価が 11%出現した。また、項目 21「共に学び合う学級づくり」の肯定評価 (A+B) は 100%から 90%へ現象している。これは、個別の配慮事項が明確になった分、それを学級全体の指導といかに両立させるか、あるいは支援リソースをどう配分するかという点で、現場の教職員がより高度で現実的な「壁」に直面していることを示唆している。

今後の展望

今回の分析から、本校の特別支援教育は「個別のニーズ把握と保護者連携」というフェーズにおいて、理想的な成果を上げていることが確認された。今後の課題は、教職員が抱き始めている「体制維持の負担」と「学級経営への統合」の難しさをいかに軽減するかである。3 学期は、特定の教員に負担が偏らないよう校内体制を再点検するとともに、A 評価の高い「保護者との絆」を基盤に、家庭とも更なる役割分担を図りながら、すべての児童が安心して学べる学級づくりを組織全体で支援していく必要がある。

【6】「保護者・地域との連携」について

教職員アンケート 22-23 保護者アンケート 7、9、14、15

本領域においては、学校からの積極的な情報発信と、それに応じる形での保護者・地域の参画意識が相乗効果を生み、年度後半にかけて信頼関係を着実に構築されたことが数値に鮮明に表れている。

本校が組織的に取り組んできた情報発信の強化が、保護者からの高い信頼獲得に直結していることが確認された。

教職員

教職員評価において最も顕著な伸びを示したのは、項目 23「PTA 活動等を通じた協力関係」

である。A 評価が 21%から 45%へと倍増しており、教職員が保護者と協働して学校運営に当たる姿勢が急速に強化された。また、項目 22「適切な情報発信」においても A 評価が 32%から 45%へ上昇し、C 評価（課題あり）が消失した。これは、ICT 活用を含めた多角的な発信が、教職員自身の「伝えている」という実感に繋がっていることを示している。

保護者

保護者評価は、全領域の中でも極めて高い肯定的評価を得ている。項目 7「情報発信（おたより・HP 等）」および項目 9「学校開放・意見聴取」では、肯定評価（A+B）がいずれも 95%を超えた。特に項目 9 の A 評価は 56%から 60%へ微増しており、学校の透明性に対する信頼が確立されつつあるといえる。一方で、項目 14「PTA 活動への参加」については、肯定評価（A+B）が 82%から 75%へと減少した。これは、学校側が協力関係の深化（項目 23）を感じているのに対し、保護者側は依然として活動への参加を「心理的負担」や「多忙感」の中で捉えている可能性を示唆している。地域行事への参加（項目 15）が 40%台で横ばいである点も含め、学校支援の輪をいかに広げるかが継続的な課題である。

今後の展望

今回の分析から、本校は「学校の様子を可視化し、信頼を得る」という第一段階を高いレベルで達成したと言える。今後は、得られた信頼を基盤に、保護者や地域を「情報の受け手」から「学校づくりのパートナー」へとシフトさせる取り組みが必要である。3 学期は、PTA 活動のスリム化や参加形態の多様化を模索し、保護者がより「参画」しやすい環境を整えることで、学校と地域の互恵的な関係をさらに強固なものにしていきたい。

(7)「小中一貫校への取り組み」について 教職員アンケート 24 保護者アンケート 16

全体として、保護者への制度周知と理解促進には多大な成果が見られたが、教職員側における「一貫教育の実効性ある実践」については、更なる深化が求められる段階にある。

義務教育 9 年間を見据えた教育課程の共有と、目指す児童生徒像の具現化に向けた取り組みは、教職員・保護者双方において着実な理解と浸透が進んでいる。

教職員

教職員評価（項目 24「目指す児童生徒像の理解と取り組み」）において、最も顕著な変化は A 評価の向上である。7 月の 21%から 12 月には 32%へと 11 ポイント上昇した。小中一貫教育は、往々にして「中学校区の理念」という抽象的な理解に留まりがちだが、この数値の伸びは、日々の教育課程の中に「中学校への接続」や「3 校共通の指導」を具体的に意識した実践が増えていることを示している。一方で、C 評価が 16%で横ばいである点は、学年や分掌によって、一貫教育のメリットを授業や生活指導に具体的に落とし込むまでのハードルの高さが依然として存在していることを物語っている。

保護者

保護者評価（項目 16「3校連携による教科指導等の理解」）については、肯定的な評価（A+B）が 91%から 92%へと極めて高い水準で安定している。A 評価についても 42%から 45%へと微増した。本中学校区における連携の取り組みが、単なる形式的なものではなく、保護者にとっても「中学校へのスムーズな進学」や「他校との交流」という形で可視化されている結果と言える。12月時点で否定的評価（C・D）が計 8%存在するが、これは一貫教育の具体的な「学習効果」をより実感したいという保護者の期待の裏返しとも捉えられる。

今後の展望

今回の分析から、本校における小中一貫教育は、保護者からの高い認知・信頼を基盤としつつ、教職員の意識が「理解」から「意識的な実践」へと一段階進んだことが確認された。今後の課題は、教職員間の評価に残る二極化の解消である。3学期および次年度に向けては、教職員が感じている「一貫教育への取り組み」の心理的・業務的負担を軽減しつつ、授業公開や情報交換の質を高めることで、9年間を通した「確かな育ち」をより実感できる体制を構築していく必要がある。

(8)保護者自由記述欄

保護者アンケートの自由記述欄には、教職員とは異なる様々な視点からの貴重な意見や提案をいただいた。一つひとつの声は、児童の健やかな成長を願う切実な思いであると深く受け止めることが重要である。限られた予算や人員、設備等の都合により、すべての要望に即座に対応することは難しいが、学校として、保護者からの視点を今後の学校運営を改善していくための重要な指針と捉える必要がある。

1 学習に関する内容

① 少人数学級について

一人ひとりの児童に寄り添ったきめ細かな指導を行う上で、少人数による教育環境が有効であることは学校としても深く認識しております。現在、公立小学校の学級編制は法令や自治体の基準に基づき行われており、学校独自の判断で学級数を増やす（1クラスの人数を減らす）ことは難しい現状にあります。

そのため本校では、現在の学級規模の中でも「少人数制」に近い効果を得られるよう、複数の教員で指導にあたる「チーム・ティーチング（TT）」を導入し、きめ細かなチェックを行う指導体制をとっています。また、今後はさらに ICT 端末を活用し、個々の習熟度に合わせた学習課題の提供や、リアルタイムでの意見集約を行うことで、大人数学級でも個々の反応をこぼさない授業づくりに努めていきたいと思っております。

今後も、限られた条件の中で最大限、お子様一人ひとりの良さを伸ばし、学習の定着を図れるよう体制を整えてまいります。ご理解とご協力をお願い申し上げます。

② 運動会の種目について

運動会の種目について「毎年変更してほしい」という貴重なご提案をいただきました。新しい種目への挑戦が、児童や保護者の皆様に新鮮な感動をお届けできるという点は、学校としても大変重要な視点であると考えております。

一方で、同様な種目を継続して実施することで、児童が前年度の経験を活かし、「今年はずっとこうしたい」という自発的な活動や見通しを持った活動が可能になったり、上級生の姿を見て「自分もあのような上級生になりたい」と憧れを持つ心を育んだりする機会となります。

今後は、伝統ある種目の良さを活かしつつ、「継続による成長」と「変化による新鮮さ」の両立を目指して検討してまいります。皆様の温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

③ 学習規律について

授業中の学習環境の改善をお願いしたいです。授業中、私語やお友達同士で大きな声で話して居る子がいるようで、先生の話しが聞き取りにくい事が多々あるようです。

貴重な学びの場が、一部の児童の言動によって妨げられているという現状について、学校として重く受け止めております。

本校では、すべての子どもたちが安心して学習に集中できる環境を整えることを最優先事項としております。ご指摘いただいた点につきましては、以下の通り組織的に取り組んでまいります。

□**共通の学習規律の再徹底**：「話を聞くときは話し手の方を向く」「反応を大切にする」など、全校共通の学習規律について、全教職員が足並みを揃えて粘り強く指導を行っております。

□**組織的な見守りと支援**：担任一人の指導に留まらず、他の教職員が定期的に教室を巡回し、多角的な視点から児童への声掛けや環境改善を行っております。

□**授業の工夫**：子どもたちが「もっと知りたい」と惹きつけられ、自然と学習に集中できるような授業展開の工夫についても、教員研修を通じて研鑽を積んでおります。

学習習慣の定着には時間がかかる場合もございますが、根気強く指導を継続してまいります。ご家庭におかれましても、学校での様子について話題にさせていただくなど、今後ともご理解とご協力をお願い申し上げます。

④ 多面的な学校生活について

本校の教育活動に対し、専門的な知見に基づいた極めて示唆に富む提言で、学校教育の可能性を広げるアイデアを共有していただけることは、私たち教職員にとっても大きな刺激となります。

□**「演劇」を取り入れた学習について**…演劇が持つ「共感性の育成」や「物語理解力」への効果は、まさにこれからの時代に求められる「非認知能力」の育成に直結するものと認識しております。現在は国語科の音読劇や生活科・総合的な学習の時間、あるいは道徳における役割演技（ロールプレイ）といった形で一部取り入れておりますが、ご提示いただいた「学習ツールとしての演劇」という視点は、今後の授業改善における貴重なヒントとさせていただきます。

□「祭り出店運営」の経験について…経済観念の学習やチームワークの構築など、生きた学びの場としての「起業体験的活動」の重要性は、新学習指導要領が目指す「社会に開かれた教育課程」とも合致するものです。実施にあたっては、授業時数の確保や安全管理等の検討が必要ですが、児童会活動や総合的な学習の時間の中で、子どもたちが主体的に「運営」に関わる場面をいかに創出できるか、検討してまいりたいと存じます。

□「多様な休憩時間の過ごし方」について…雨の日の過ごし方や、クラスを超えた交流の場づくりとして、空き教室の活用やボードゲーム等の導入は非常に現実的で魅力的なアイデアです。児童の安全を見守る体制やルールの整備を考慮しつつ、空き教室がないという本校の実情を踏まえながら、子どもたちのリフレッシュと交流の両立に向けてどのような形が可能か、教職員で協議してまいります。

学校教育は、限られた時間枠・限られた環境の中ではございますが、今回いただいたような「社会とつながる深い学び」の視点を失わずにいたいと考えております。今後とも、本校の教育活動のパートナーとして、温かいご支援とご提言をいただけますと幸いです。

⑤ 家庭学習について

宿題の分量については、学年や学習内容の状況に応じて調整しておりますが、お子様によって定着度や集中できる時間は異なり、ご家庭での負担感が大きくなっている現状を受け止めております。今後は、改めて学級や学年で「適切な学習時間（学年×10分程度）」の目安を意識し、内容の精査やバランスの調整に努めてまいります。また、個人差等によりどうしても負担が大きすぎる場合は、担任へお気軽にご相談ください。

家学週間や自主学習年生には、学習内容や知識の定着だけでなく、高学年に向けて「自分に今、何が必要かを考える力（自律的な学習姿勢）」の基礎を養うことも目指しています。しかし、低学年の児童が白紙の状態から内容を決めるのが難しいという点は、学校としても十分に配慮すべき課題であると認識いたしました。つきましては、お子様が迷わず取り組めるよう、以下の支援を強化してまいります。

□「自主学習メニュー」の提示：漢字の練習、計算の復習、読書、日記、生活科の観察など、具体的な具体例を記した用紙を配布・掲示し、選びやすくします。

□授業との連動：授業の中で「今日のこの内容は自主学習でも使えるね」といった声掛けを行い、家庭学習への橋渡しを行います。

□頑張りの価値付け：提出された自主学習に対し、担任が丁寧なフィードバックを行い、お子様の意欲を高める工夫を継続します。

家庭学習は、学校での学びを定着させる大切な時間ですが、何よりお子様が「分かった」「できた」という達成感を得られることが重要です。今後ともご家庭と連携しながら、無理なく、前向きに取り組める形を模索してまいります。

2 施設に関する内容

① トイレについて

本校では数年後に校舎の「大規模改修工事」が予定されており、その際にトイレの改修も計画されております。多額の予算を伴うため、現段階で個別の設備を増設・改修することは叶いませんが、その分、改修時には最新の衛生環境を整えられるよう、保護者の皆様の声を反映した要望を市当局へ伝えているところです。

改修までの期間につきましても、消臭剤の活用や清掃方法の工夫により、少しでも児童が快適に使用できるよう、職員一同、衛生管理に注力してまいります。何卒、中長期的な視点でのご理解をいただけますと幸いです。

② 照明について

お子様の目の健康や集中力に関わる大切な点であり、学校としても早期の改善を検討してまいりました。その結果、来年度中に全ての教室において「LED照明への全面改修」が実施されることが決定いたしました。本来であれば即座に全ての不具合箇所を修繕すべきところではございますが、間近に迫った全面改修計画との兼ね合いにより、現在は緊急性の高い箇所の応急処置を中心とした対応とさせていただきます。

LED化により、より明るく、目に優しい環境が整いますので、それまでの期間、担任と連携しながら児童の学習に支障が出ないよう細やかに見守ってまいります。保護者の皆様には、教育環境の質的向上に向けた過渡期として、温かく見守っていただけますと幸いです。

③ 送迎の駐車スペースについて

駐車スペースの不足や、校門付近の混雑による危険性について、ご不便やご心配をおかけしていることを重く受け止めております。本校では、児童の安全確保と、集団生活を通じた社会性の育成を目的として、「登校班による徒歩登校」を原則としております。送迎車両の増加は、徒歩で登下校する児童の列との接触リスクを高め、重大な事故につながる懸念がございます。

そのため、JA飯野支所の跡地の借用を検討しましたが、賃貸料が発生するため、限られた学校予算の中での恒久的な用地確保は、現時点では極めて困難であるという結論にいたりしました。

また、駐車スペースを拡充することは、さらなる送迎車両の増加を招き、結果として校内および周辺道路の混雑を助長し、徒歩登校の安全性を損なう恐れがあると考えております。限られた敷地内でのスペース確保が困難であるという物理的な制約もございますが、何よりも「児童の歩行の安全」を最優先に考え、現在の運用を継続させていただく判断にいたっております。怪我や体調不良、やむを得ない事情がある場合を除き、可能な限り徒歩での登下校にご協力いただけますよう、改めてお願い申し上げます。

④ 体育館のエアコンについて

近年の夏季における気温上昇を鑑みますと、体育館の環境改善は児童の健康を守る上で、極めて重要な課題であると認識しております。

体育館へのエアコン設置につきましては、多額の予算を伴う大規模な施設改修となるため、市が主体となって進める事業となっております。市の方針として、来年度以降、市内の小中学校へ

順次設置していく計画があると聞いております。現時点では本校への設置時期は明示されておられません、学校といたしましても、早期設置に向けて継続的に強く要望してまいります。

設置が完了するまでの期間につきましても、児童の安全を第一に考え、以下の対策を徹底してまいります。

- 暑さ指数の厳格な管理： WBGT（暑さ指数）を測定し、基準を超える場合は体育館の使用を中止、または内容を変更します。
- 現有設備の活用： 大型扇風機を増設し効率的に運用するとともに、積極的な換気に努めます。
- こまめな水分補給と休憩： 活動中も児童の体調を細やかに観察し、無理のない運動を行います。

保護者の皆様にはご心配をおかけいたしますが、環境が整うまでの間、ソフト面での対策に全力を尽くしてまいります。何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

3 その他

① 登下校について

児童の安全は、学校にとっても最優先で守るべき事項であり、保護者の皆様が抱かれるご不安を重く受け止めております。

登校班は、各地区の支部長様を中心に編制したものを学校にご報告いただいております。そのため、登校班の編制に関する要望などは支部長様にお伝えいただければと思います。しかし、登下校中の児童同士のトラブルにつきましては学校の各地区の担当が対応しますので、学校にご連絡をいただければと思います。ただし、登下校に関するトラブルにつきましては、学校だけで解決できない場合が多いため、保護者の皆様のご協力をいただくこともあります。その際は、よろしく願いいたします。

見守り体制の強化につきましては、現在、教職員は登校時間帯には、教室での出迎えや校内での児童の安全管理、下校時間帯には放課後の指導や翌日の授業準備等に当たっております。誠に心苦しいのですが、限られた人員の中で校区の広範囲にわたる見守り活動を恒常的に実施することは、物理的に困難な状況にあります。

そこで、「登下校の安全は、学校・家庭・地域が連携して守っていくもの」という考えに基づき、本校では引き続き、以下の取り組みを推進してまいります。

- 見守り隊との連携： 地域の方々による見守り活動への感謝をお伝えするとともに、危険箇所の情報共有を密にしていきます。
- 「こども 110 番の家」の再確認： いざという時に駆け込める場所を、児童が具体的に把握できるよう指導を徹底します。
- 交通安全教室の実施： 自分の身を自分で守るための判断力を養う指導を継続します。

学校といたしましても、警察や自治体への交通安全対策の要望（信号機の設置や標識の改善等）を継続し、少しでも安全な登下校環境が整うよう努めてまいります。今後とも、地域全体で子ども

もたちを見守る活動へのご理解とご協力をお願いいたします。

② 感染症について

本校では、感染症の情報公開にあたって、感染拡大を防止することと同時に、罹患した児童の特定や、それに伴う差別・偏見を防ぐことも優先すべきことと考えております。学級等の規模によっては、詳細な人数を公表することで個人が特定される恐れがあるため、学級閉鎖等の措置が必要な基準に達した場合には、速やかに当該学級および全校へお知らせし、感染拡大防止に努めてまいります。お子様のプライバシーと、安心・安全な学校生活を守るための対応であることをご理解いただき、温かく見守っていただければ幸いです。

③ 写真販売について

写真販売につきましては、他校の事例も含め検討してまいりましたが、写真の選別、個人情報保護の観点からのチェック、販売管理等に膨大な業務時間を要することとなります。現在、本校では「教員が子どもたちと直接向き合う時間」や「授業準備の時間」を最優先に確保することを進めており、新たな業務の導入については慎重に判断せざるを得ない状況です。

せっかくのご要望にお応えできず心苦しいのですが、今後も学年だより等で、できる限り工夫して活動の様子をお伝えできるよう努めてまいります。何卒ご理解をいただけますようお願いいたします。

④ 教職員の多忙化解消について

非常に具体的かつ建設的な「DXによる『ゆとり時間』創出」のご提案をいただき、心より感謝申し上げます。何より、私たちの多忙感を案じ、「先生方がもっと笑顔で子どもたちと向き合えるように」という温かいお言葉をいただいたことに感謝いたします。

ご提示いただいた千葉市の事例は、ICTを単なる「道具」としてだけでなく、教員の「時間」と「心のゆとり」を生み出すための「手段」として捉えており、本校、そして南アルプス市が目指す方向性と合致する非常に示唆に富むものでした。

いただきました3つのアクションにつきましては、以下のように受け止めております。

既に実施・運用しているもの…本校でも重要性を認識し、既に取り組みを始めております。

今回のご提案を受け、より効果的な運用になるよう改めて見直してまいります。

今後、前向きに導入を検討したいもの…先生方の負担軽減に直結する非常に有効な手段だと感じております。校内の体制整備や市教委との連携を図りながら、実現の可能性を探ってまいります。

実現に時間を要するもの…法的な枠組みや予算、システムの互換性などの観点から、すぐに導入することが難しいものもございますが、理想的なゴールの一つとして、長期的な視点で検討材料とさせていただきます。

学校だけで解決できない課題もございますが、今回のように保護者の皆様から専門的な知見や他都市の好事例を共有いただけることは、学校運営をアップデートする大きな原動力となります。

いただいた「道具を時間に変える」という視点を大切に、子どもたちの前で最高の笑顔でいられる学校づくりを推進してまいります。

【3】学校運営協議会委員の助言等

① 主に児童に関すること

○スマートフォンやタブレット端末などの使用時間が長いのが気になる。テレビは家族全員で視聴をするが、スマートフォンなどでは個人の視聴になってしまい、家族との交流も減ってしまう。さらに、視力が落ちたり、有害なサイトを見たりするなど、負の影響が出ていることが気になる。オーストラリアでは16歳以下の使用が禁止になったが、日本でも制限をかけられないものだろうか。また、新聞を広げれば様々な記事を目にすることになるがスマートフォンやタブレットでは、使用者の傾向を分析して、それに合った情報を送ってくるから視野が広がらない。そして、情報を受けるばかりになり、自分で考えることが少なくなっていることに危機感を感じる。

○子どもたちにとって何が魅力かを考えることが大切である。SNSやゲームなどの魅力には、私たちが何をやっても恐らく敵わないと思う。だからこそ、それらの魅力に負けないことに学校として取り組まなければならないと思う。地域の住民として、子どもたちの表情や明るい声を見たり聞いたりしていると、この地域の子どもたちは、とても素敵な時間を過ごしているという雰囲気を感じている。

○これまで、長期休み中に公園で遊ぶ子はそれほど多くなかったが、ことしは6年生がクラスの枠を超えて仲良く遊んでいる姿を何度も見かけた。その様子を見ると、子どもたちは、とても生き生きとしており、成長を実感するとともに、感慨深く感じる。

② 主に指導に関すること

○低学年の子は、困りごととして「友達にこんなことを言われた。」「話しかけたけど答えてくれなかった。」などを挙げているが、そのような事象が極端に進むと不登校になったり、いじめになったりする。しかし、高学年になると困りごとは減少している。ここが過渡期という見方ができるが、そのポイントを間違えると大きな問題に発展する琴になるな構成があるので、慎重な指導が必要だと思う。

○一般的に学校は「確かな学力」という言葉に代表されるように、社会的には「学力をつける」ことに重きを置かなければならない雰囲気がある。しかし、この資料の「目指す子ども像」の中には「勉強ができる子」との記載はない。「相手の気持ちが思いやれる」のように点数に出てこないもので、分かち合ったり、対話して学んで伝え合ったり、みんなと支え合い働いたりする力の方が世間に出て役に立つし、価値があるということを伝えていって欲しい。

○現場で感じるのは、子どもの表情や授業の反応で、その子の様子をつかむことができる。このアンケートの数字だけではなく、子どもたちの様々な言動で感じて、それを教師が受け止めて

子供に返して挙げることが重要である。

- アンケートに「学校楽しいですか？」とあるが、「楽しい」とはどのようなことなのかを教える
琴が必要だと思う。SNS等を観て面白いというのと、学校で何か勉強したり、友達と関わっ
たり、行事で苦労したけれどそれをやり遂げて「楽しい」と感じるような、楽しさの質や価値
を考えさせるところが学校である。
- 無言清掃は、「なぜ清掃中にお喋りをしてはいけないのか」「働くときは黙って働いたほうがい
いに決まっている」などを子どもと一緒に考えることで、形だけではなく、質を高めていくこ
とが大事である。
- 「友達の話を聞いて自分の感情を伝えてますか」の肯定的回答が少ないのは、恥ずかしさもある
だろうが、表現の仕方や伝え方が分かっていないのではないかと思う。そこで、保護者アン
ケートの自由記述欄にあった「演劇」を取り入れるのも良いと思う。演劇は、主人公もいれば
目立たない子もいる。また、それぞれがそれぞれの役割で動くので、チームとして協力してい
く意識が育まれていくと思う。

③ 主に学校や教職員に関すること

- 地域だけではできないこと、家庭だけではできないこと、学校だけではできないことなど、そ
れらが自然な形で巻き込み合い、連携することが大切であり、それがまさにコミュニティスク
ールである。

④ 主に保護者や地域に関すること

- 今年も二十歳の集いを開催した。26人中23人が出席した。小学校時代を良い雰囲気でも過ご
し、卒業した子どもたちの学年は大勢集まる。その反対に、少し落ち着きのなかった学年は出
席率が減少する。飯野地区に根付いている地域の力や小学校の時にどんな楽しい思いをした
か、それから何を学んだかということがその後の成長にも大きな影響を与える。そのために大
切なのは「授業」「授業以外の活動」が大きな影響を与えると思う。そのような学習や活動
を通じて「魅力」を伝えることが重要である。私たち大人が面白いと感じる姿を見せることで、
SNSやゲームを上回る魅力を子どもたちに感じさせることができると思う。例えば合唱は、そ
れが持つ力で心を揺さぶる力があるので、子どもたちの心を育てる効果があると思う。また、
以前は「飯野小まつり」や「演劇」があり、そのような活動も子どもたちの心に大きな影響を
与えると思う。
- 飯丘地区では8年ぶりに盆踊りを開催し、多くの子どもが来場し、盆踊りの輪の中に入って踊
ってくれた。地域の人と子どもたちが一緒に楽しめるイベントがあるということは、とても良
いことだと思った。地区の運動会も含め、みんなが顔を合わせて会話をする場はとても貴重だ
と感じた。ぜひ地域の子供たちの力を借りて盛り上げていきたいと思う。